

たんだなあーと思い聞いていました。そしてHくんやNちゃん^{しんけん}の発表を真剣に聞いていました。Nちゃんの発表には、ちょっと泣きそうになりました。いっぱい悩んだりしてしんどいんだなーと思いました。Hくんは行きたい高校があって、そこに行くように頑張っていることを聞いて、いいことだなあと思いました。私もはやく夢をちゃんと決めて、それに向けて勉強していきたいと思います。みんな遅刻することや授業に出ないのはダメって分かっているから、絶対なおしていけるなーと思いました。私は遅刻をしないように頑張っています。期末に向けて自主勉強をしたりしています。遅刻をしないようにすることや自主勉強は3年生になってもずっと続けていきたいと思います。2年生が3年生になってもっといい学年になるように頑張っていきたいです。

2年生最後の全体学習。今回の全体学習で、清水先生をはじめとしたいろんな人の話を聞いて、本当に心から自分自身^とに問いかけることができたように思います。言葉^{つた}の伝え方、クラスの在り方^あ、部落問題に対する意識。いろんな事を自分に問いかける中で、共通したことが頭に浮かびました。それは、人まかせ・できたつもりではいけないんだということです。自分は何もしない、考えないでは、絶対^{ぜったい}に問題は解決しないんだということが分かりました。今まで私は、クラスの雰囲気^{おんい き}づくりとか、どこかで“もうできている”という気持ちがありました。でも、クラスのみんがそう感じないと、できていることにはならないと気づきました。これから、さまざまな問題について考えるとき“自分には何ができるか”という気持ちを忘れないようにしたいです。

私は清水先生の話やいろんな人の意見などを聞けて、それだけでこの全体学習は私にとって、とても意味のあるものでした。発表しなかったけど、KくんやHくんの話聞いて、みんな悩んでいるんだなーと思いました。Kくんはもう受験のことを真剣に考えていて、すごいと思いました。それに比べて私は、まだ何もってわけではないけど、そんなに真剣に考えてるわけでもなくて、けど今の成績のままでいくと、志望の高校には行けないかもしれないから、もっと頑張って勉強しようと思うんだけど、行動を起こせなくてとても苦労しています。Hくんは授業を受けようと努力していると言っていたけど私はHくんと少し違い、教室で座^{すわ}っているけど、いるだけで話をしたりして、先生の話^{はな}を全く聞いていませんでした。このままではダメだと思って先生の話^{はな}を聞く努力をしています。でも、つい寝てしまったりして、なかなか授業中1時間ずってわけにはな

なかなかできません。けど、少しずつ頑張ってやっていこうと思います。

発表したみなさんからは、こんな感想も届きました。

「行きたい高校に絶対行って、野球で甲子園に行きたいです。」

「終わり頃に泣きながらも嫌だったことを言いました。言った後はスッキリしました。」

「後藤先生や岩佐先生など、いろんな先生が声をかけてくれた。中でも『勝利を勝ち取ること、それは夢をあきらめないこと』と言ってくれたとき、失いかけていた志望校への夢を取り戻せた。あと1年、今まで以上に死力を尽くして勉強して、志望校に受かってみせる。」

山田孝野次郎もそうですが、「たかが14才、されど14才」だと思いませんか？感想の中には、声をかけてくれた先生方に対する感謝の気持ちも綴られていました。私は、彼ら彼女らがもう卒業していくかのような錯覚すら感じてしまいました。

本当の卒業式もいよいよ来週です。これまでの生活を振り返り、卒業生の想いと各自それぞれの想いを重ねて、みんなにとってステキな卒業式にしてみませんか？

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼



◆いよいよ今週は、多くの3年生にとって最大の山

場「徳島県公立高校入学試験」^{とくしまけんこうりつこうこうにゅうがくしけん}、そして1・2年生には「学年末テスト」があります。そして週末には、今年度学習会最後の行事「宿泊研修」があります。宿泊研修のメインは、在日^{ざいにち}韓国・朝鮮^{かんこく ちょうせん}の方々との交流です。その他にも、いろんなホンモノに触れる日程も組んでみました。詳しい中身については、参加した学習会の仲間には是非聞いてみてください！行ってきま〜す！ ◆「MY SKY」は来週、卒業生に向けた臨時号^{りんじごう はっこう}を発行します。お楽しみに！

◇ これからの日程 ◇ ◇ ★☆☆ ★★★ ☆☆☆★★★★ ☆☆☆

3月7日(水)～9日(金) 1・2年生学年末テスト

8日(木)・9日(金) 徳島県公立高校入学試験(16日：合格発表)

10日(土)・11日(日) 学習会宿泊研修(3年生を送る会・閉講式)⇒過去最高の参加に挑戦し、学習しよう！

13日(火) 卒業式 23日(金) 終了式

女性たちの

「生きる」闘い 最終回

〈差別意識に染まる前に〉

子どもに「地区出身を教える」ということ。このことをめぐる部落の親の悩みは深い。その悩みには、大きく分けて二つのタイプがある。

一つは、子どもに地区であることを明らかにする方向での悩み方。もう一つは、子どもには隠しておく方向での悩み方である。

Aさんの場合は、もちろん、前者のタイプの方向で、その悩みを語る。

「私は、子どもが地区であることを自覚するのは、早ければ早いほどいいって思ってます。自分の出身を子どもが聞いた時、例えば、社会人になって『実はお前は、部落だったんだ』って聞いた人間は、必ずショックを受けるっていうんですよ。」

Aさんは、それがどんなに残酷なことかを知っている。子どもが、大人になるまで出身を知らないということ。それは、部落の子どもの心を致命的に傷つけていく。何故なら、知らされなかったがために、子どもの価値観の中には、反差別の思考などない。自分も世間の差別意識を身に付けたまま、大きくなっていく。そしてある時、「自分が部落だ」と知らされる。その時、その子の心(自我)は、メチャクチャに傷つ

く。なにしろ、それまでの人生の中で、さーさん差別してきた部落が、実は自分だったのだから。

「だから、『実は自分がそうだった』って、ショックを受けるわけじゃないですか。だから、そういうの、絶対にイヤだし。それくらいなら、小さいうちから自然に部落だって言うた方が、自分が部落だってことがなんでもなくなるっていうか……。」

Aさんが、わが子を小さな頃から「解放子ども会」に行かせたわけが、ここにある。では、子どもに地区を隠す方向での悩みとは何か。ここでは、Dさんのケースを通してその悩みを取り出してみる。

「今春休みだから、小学校6年生と4年生の子どもたちが家にいるんです。家の中で差別の話をしていると、子どもがどこかで話を聞いていると思うので、この話は出来ません。私自身、今のままの状態がいいと思っています。寝た子を起こすようになるので、話したくはありません……。」

このDさん。典型的な寝た子論を語った。子どもには「地区」を全く教えていない。

だが、このDさん。「部落差別がなくなつた」とは、決して思っていない。むしろ、毎日の生活のなかで「差別」に怯えて生きている。だからこそ、子どもには、地区を知られたくないのだ。言葉では「今のままでいい」と語っている。が、本当に「今のままでいい」とは思っていない。

このDさんも、現実には、部落差別がイヤというほどあることを知っている。だからこそ、子どもに「地区」であることを、必死で隠そうとするのだ。部落差別の厳しさについては、実はDさんも、Aさんと同じくらいに認識している。その認識の表現が違っただけである。

第四ステージ：これからの展望

近所とのつき合いの中で
〈ひとのことで心配〉

Aさんは、今「解放子ども会」に積極的に関わっている。教師と地域と一緒にあって、子どもを育てて行きたいと語る。

「今のまま、ただ、遊ぶだけの子ども会だったら、今年小学校を卒業する子どもたちは中学校に行つて運動しなくなってしまう。でも、学校を卒業して、もし、その子らが結婚差別にあつたらどうするんだらうと思うんです。」

Aさんは、「部落の子ども」が心配だと言う。その心配は、自分の子どもだけに留まらない。

「やっぱり、ひとのことで心配なんですよ。」

そう一言、ボツリと呟いた。

〈寝た子論の親たち〉

そんなAさんも、それぞれの子ともたちには、さまざまな家庭の事情があることも

知っている。

「それこそ、子どもの送り迎えで、Eさんと目が合うんだけど、反らしてんです。解放奨学金の手続きに行くと会うんだけど。保育所では、目を反らしてです。ああ、言われたくないんだなあと思つて……。」

それぞれの家族の中で、部落差別の話がどの程度なされているかは、その家庭の中でしかわからない。そして、地区の中でも、必ずしも解放運動に賛成しない家庭も多くある。

「部落の中でも運動せにや、差別は無くなつていくっていう考え方が、かなりあるんです。だから、私らみたいに運動しよる人間を冷たく見るいうんか、『そんなことしてもどうにもならんのに、よけいに私らが部落じゃ言われるけえ、やめて……』という風潮があるんです。」

部落差別はある。それも今、生活している現実の中に根強くある。しかし、その差別が厳しければ厳しいほど「触られたくない痛み」があることもまた、事実なのだ。

親戚の中で

〈隠して生きる〉

Aさんの親戚の中でも、「部落」であることを隠して生活しているひとがいる。

「まあ、悔しいんだけど。同じイトコ同士で、同じ立場なんだけど。その子の親が『隠す』って言うのに、私らが『あんたは

部落なんよ」って言う立場じゃないでしょう。だから、正月とか親戚が集まる時は、それこそ運動関係の本とかポスターとか全部隠して、その家族の為にね。だけど、いくら隠しても、その子の子どもが、差別を絶対に受けんという保証はないわけで……」

解放運動をしているAさんにとって、自分のイトコが「部落」を隠して生きていることは、なんとも言えず、やるせないことだという。が、そうやって「隠して」生きていることの「しんどさ」を、Aさんは知っている。

「だから、祖母も言いますよ。『外に出てる子は、かわいそう』というて。『あんたらは、ここにおつて、運動出来るけえいいけど、あれらは、隠して隠していかんやいけん。そつちのほうか、かわいそう』言うてね。私もそう思います。」

隠してはいても、いつやつて来るかもわからない「部落差別」。Aさんの親戚は、日々「差別」に怯えながら生きている。

〈切り離された親戚〉

Aさんの親戚だけではない。部落差別は、さまざまな人間関係をも切り離していく。Fさんの例がそうだ。Fさん、30代の女性。「それこそ、同じ所で育つとるのに、『あそこは親戚じゃありませんから』言うて親戚を切り離してみたりしてねえ。そういうことがしょっちゅうあるから、もう、ど

こで何を言うていいんかわからなくなる時がありますよ……」

同じ部落に育ちながら、その「差別」から逃れる為に、親戚関係までも切り離してしまう。「そんなばかなことを……」と言ってしまうことは容易だ。だが、そうまでしても部落差別の重圧から自由になりたいという、切なる叫び声が、そこにある。

これからもAさんは、解放運動と共に自らの人生を生き続けたいと語る。

「まあ、やらなきゃいけないいうて、肩張つてるところもあるけど。やっぱり、子どもを守る為には、実践していかんやいけんし。子どもに「隠すな」言うというて私が隠しとつたらいけんでしょう。だから、しんどいめに遭う時は、子どもと一緒に思うんです。」

差別があるから、切り離されて行く人間関係。それは「哀しい」生き方に違いない。しかし、そこには、容易に解決することが出来ない、それそれが抱えるさまざまな差別がある。だからこそ、Aさんは、解放運動することを選び続ける。自分の生き方の中で、解放運動を掲げ続けようとする。掲げ続けていかなければ、部落差別が自身を壊していくことを、Aさんは知っている。

対抗文化の創造へ

以上、第一ステージから第四ステージま

で、主にAさんの聞き取りを中心にして被差別部落に生きる女性たちの「生きざま」を再現した。そのことを通して、彼女たちを取り巻く部落差別の状況を明らかにしてきた。

最後に、これらの女性たちの「生き方」から、部落差別を解決する為に何を問題点として展開していくべきかについて、若干の問題提起をおきたい。

①「逃げよう」と「闘おう」と、被差別部落の女性たちは、常に部落差別を意識し続けるということ。

被差別部落の女性たちは、常に部落差別を意識して生きざるを得ない。自らの出身を知った時から、彼女たちは、いつ差別に出会うかもしれないという「不安」と「怯え」の中で生きる。差別から「逃げよう」と選択するか「闘おう」と選択していくかは、常に差別を意識する結果の選択である。故に被差別部落の女性たちは、部落差別を常に意識して生きる。

②「闘い続ける」こと、そこに生きる展望があるとこと。

では、部落差別から「逃げよう」として生きる女性たちが、どんな生き方を強いられるのか。それらについては、第三ステージでのCさんのケースや、Dさんのケースに見ることが出来る。彼女たちは、差別が

厳しいからこそ「逃げる」方向を選択せざるを得なかった。

しかし、残念ながら、差別から「逃げる」選択を通しては、女性たちの生きる展望を見いだすことは出来ない。何故か。それは差別と向き合つて闘わなければ、彼女たちは、差別的日常の中に埋没させられてしまうからだ。

差別は、彼女たちを、閉塞的な状況の中に押し留める。それは、「ひと」としての誇りを根こそぎ奪われることを意味する。部落差別との闘い。そのことを放棄してしまえば、彼女たちは、差別によって心も身体も蝕まれてしまう。常に差別に晒されたところで、「怯え」や「不安」を抱いたままで、「ひと」が自ら輝く生き方など、出来るはずはない。

解放運動から離れたところにいる、20代のCさん。彼女の閉塞的状況は、部落差別そのものと言っても過言ではない。Cさんは、既存の価値に取り込まれ、「下位文化」の中で首をすくめて生きる生き方を、今の所選択しようとしている。だから、出口が見えない。

このCさんとは対照的に、解放運動を掲げ続けて生きるAさん。既存の価値(差別に取り巻かれていく)と闘い、新しい生き方を模索し続けようとする。

彼女の目は、輝いていた。それが「対抗文化」の創造である。完